

[講演要旨]

ミシェル・ビュトール氏講演会報告

奥 純

平成13年4月、ヌーヴォー・ロマンの代表的な作家ミシェル・ビュトール氏がフランス大使館の招聘により来日し、本学では、外国語教育研究機構主催のFDセミナーの一環として、文学部フランス語フランス文学科が協賛し、4月23日月曜日に講演会が開催された。

講演は、「フランスから見た日本」という演題で、午後1時から尚文館1階のマルチメディア AV 大教室で行われた。200人収容できる教室が、学生や大学院生、そして教員の皆さんで満員になり、内容、発声ともに実に明晰な講演に聴衆は魅了され、質疑応答を経て、講演会は約1時間半後に終了した。盛会であった。

当日は、外国語教育研究機構の菊地 歌子助教授と平嶋 一美専任講師が同時通訳を行い、司会は近畿大学の米谷 巍洋教授、そして奥が会場のオペレータを務めた。各先生方と、ビュトール氏招聘に関して多大なご苦勞を頂いた大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズ館長のフレデリック・ダール氏、そして奈良日仏協会事務局長の仲井 秀昭氏に厚く御礼を申し上げる次第である。

講演の要旨は、以下に記す通りである。要旨の原稿は、奥が草稿を書き、司会の米谷先生と同時通訳をして頂いた菊地先生にお目通しを望った上で、奥がまとめて作成した。従って、当然、最終的な文責は奥にある。

「フランスから見た日本」

(Le Japon vu de la France.)

フランスの作家達は、古来、日本について、同じ一つの国のことを語っているとはとても思えないほどに多様なことを語ってきたが、彼らによって描き出されたさまざまな日本のイメージには、時代とともに変化してきた両国間の関係が現れている。

まず、モンテスキューが『法の精神』で江戸時代の日本について語ったのが最初であるが、しかし、そこに見られる記述はまだ散漫なものであり、実はヴォルテールが、日本について、よりまとまった記述を行っていて、その記述は、ヴォルテール自身の思想の展開において重要な役割を果たしているのである。

ヴォルテールは、その著書『諸国民の風俗と精神について』の中で、日本で最も権威のある宗教は、死後の世界での見返りと懲罰を認めており、その宗教が定める基本的な掟は、ヨーロッパ世界に見られるものと変わるものではないと述べている。こうしてヴォルテールは、地理的には、「極東」という表現にあるとおり、大陸をはさんでまったく対照的な位置にある日本の文化の中に、ヨーロッパ文明と、そして、当時の人々が崇拜していたギリシャ・ラテンの古代文明にも見られる文化の最良の特徴が、共通に認められることを指摘することによって、普遍的な理性の存在を立証しようとしたのである。ヴォルテールが日本に認めた特徴には二つあって、一つ目は信教の自由である。ヴォルテールは、日本にはいくつもの宗教があって、それぞれが対立せずに共存しており、日本は寛容の国であると考えたのである。そして、二つ目は、遠い黄金の国からもたらされる物品の質の高さであった。ヴォルテールは、日本文化の中に、ヨーロッパ文明の模範となるモデルを見ようとしたのである。

こうして、ヴォルテールの論考は、百科全書派にとって強力な武器となったわけであるが、ところで、『百科全書』は、中国の文化と日本の文化を区別していないヴォルテールの見解を少し修正して、確かに日本文化は中国

から深い影響を受けているが、しかし、日本文化はそれ自体で独自性を持つものであることを指摘している。『百科全書』は、まず、日本には暑い夏と厳しい冬があり、人々は岩山を耕して節制を常とする生活を営んでいて、水は豊かに存在するが、しかし、時にはすべてを破壊する激しい地震が起こることもあるという、色々な面で両極端が混在しているような日本の厳しい自然環境について述べた上で、日本が、地理学的な面のみならず、思想家にとっても興味深い国であることを示し、神道の中に、日本の思想的・宗教的独自性を指摘し、神道は優れて理にかなった宗教であるとしている。こうして、『百科全書』は、中国と日本というそれぞれが独自に発展した文化の中に、いずれもヨーロッパ文明におけるよりも優れた普遍的な道徳が存在することを指摘して、ヴォルテールのドグマを補強しているわけである。

さて、それ以後1世紀の間、日本はフランスの文学シーンから姿を消してしまう。フランス大革命前夜から、フランス人の目は、まずヨーロッパや近東に向けられ、次いでシャトブリアンに見られるように、アメリカへと向けられたからである。そして、19世紀も後半になって、日本は再びセンセーショナルに姿を現す。鎖国を解いて明治時代を迎えた日本は大変革を遂げ、ヨーロッパの商人達が日本の商品を買いきり、ヨーロッパには日本の骨董品があふれかえり、19世紀末には、例えばフランスの印象派などに、日本は大きな影響を与えたのである。ピエール・ロチが現れたのは、そういう時代であった。

ロチは、生涯で二度日本を訪問し、日本をテーマにして三つの作品を発表している。まず第一作目は『お菊さん』である。この作品には、日本にやって来たフランス海軍の士官が、好きでもない日本人女性と戯れに結婚するという物語が語られていて、そこには、日本など、何か滑稽なことを提供してくれる存在にすぎないのだという、日本に対する植民地主義的なまなざしが現れている。この発想は、当時ヨーロッパで大流行した日本の骨董収集趣味と共通のものであるが、しかし、二作目の『秋の日本』には、鎌倉や京都についての詩的な描写があって、この作品は、ただの日本趣味

とは異なった、一段深い作品となっている。三作目の『お梅さんの第三の春』には、この両方の面が現れている。ロチはいつも、ピエール・ロチというペンネームで疑似自伝的な作品を書いている訳だが、時々本名のジュリアン・ヴィオー自身によるルポルタージュのような描写を行うことがあり、『お菊さん』と大して変わらない疑似自伝的な物語の中に挟み込まれた、宮島の描写がすばらしいのである。そこには、世俗を遠ざけた神聖な空間としての宮島が見事に描き出されている。それは、ロチが民族的・文化的偏見を越えた瞬間に行うことのできた描写であった。

ロチの作品には、三つの層がある。一つ目の層においては、ロチはフランスが世界の中心であると考えていて、いつかアジアがヨーロッパを侵略してしまうのではないかと思い、日本の近代化に不安を抱いている。そして、二つ目の層においては、日本が、建物も食器も木々もすべて小さな、まるでミニチュアの世界のように見えているのである。ここでは、不安になる要因は何もない。つまり、ロチは、子供の樂園のような世界を日本に見出しているのである。そして、この子供の樂園の彼方に、ゴーギャンが描いたような、地上の樂園のイメージがある。

また、そこには、当時のヨーロッパ人が日本を見たときに感じた、なにか「突拍子もないもの」という感覚が含まれている。当時の日本では、伝統的な文化と流れ込んできたヨーロッパの文化が激しく衝突していた。その衝突の中で、ヨーロッパの文化は本来の文脈から切り離され、通常とはどこか意味のずれた形で、日本人によって模倣されていた。それを、ロチは、滑稽に感じながら眺めていたのである。

さて、ロチの後、フランスの文学や絵画の世界には、浮世絵を通して想像された日本のイメージが、盛んに入り込んでくることになる。マネの描いたゾラの肖像に浮世絵が描かれているのも、そうした訳である。

ファン・ゴッホも、深く、そしてドラマチックに浮世絵の影響を受けた画家である。彼はオランダ人であったが、フランスに住み着き、フランス語を使う大文筆家にもなった。彼が、プロヴァンス地方に住んだのは、実際は、プロヴァンス地方は乾燥しているが日本は極端に湿度が多く、両方

の天候はまるきり正反対であるにもかかわらず、浮世絵を見て彼が想像した日本の風景に似た風景を、プロヴァンス地方に求めたからなのである。実際、ゴッホは、プロヴァンス地方の風景は日本の風景とそっくりだと考え、自分はプロヴァンス地方にいながら日本にいるようなものだと思っていた。ゴッホは、アルルにある家の部屋の壁に、草が一本描かれた浮世絵をずっとかけていた。ゴッホは、日本の芸術をよく研究すると、人は何をすれば最も賢く、かつ知的になりうるかがよくわかると述べている。それは、何も大層なことをする必要はなく、外でもない、ただ一本の草を研究すればよいのである。一本の草を描くことが、すべての植物を描くことに通じ、すべての季節を、広大な風景を、そして、ついには動物や人間を描くことに通じる。ゴッホは、そう述べている。彼は、日本人が、まるで自分が花そのものであるかのように、自然と一体になって生活しており、従って、簡素かつ鮮明に、息をするのと同じぐらい容易に、絵を描くことができるのだと考えて、日本人の生活にあこがれていたのである。また、ゴッホは、アルルにゴーギャンを招き、ヨーロッパにおける日本画家のコミュニケーションを作ろうとしたが、これはうまくいかなかった。

さて、20世紀初頭のヨーロッパに広まっていた日本のイメージは、偏に、日本で18世紀から19世紀前半にかけて描かれた浮世絵に由来するものであり、20世紀になるまで、日本を実際に訪れた作家は、ロチだけであった。しかし、20世紀になると、日本について語ったすべての文筆家は、少なくとも数日から数週間は日本に滞在した経験を持つようになり、その中で決定的な役割を果たした作家が、ポール・クローデルだった。彼は、駐日大使として日本に滞在したわけだが、日本の文化に熱中し、日本の演劇について、そして、18世紀の浮世絵を越えて、より古い日本絵画について語った初めての人であった。

クローデルが、中国や日本に求めたものは、龍の住む国であった。龍は、単に物を破壊する怪物であるばかりでなく、同時に、もっと肯定的な存在でもあり、高潔さのイメージでもある。つまり、自分の内面に存在する悪魔から身を守るためにカトリックに改心したばかりのクローデルにとって、

日本は、一種の癒しをもたらしてくれる国であったのだ。

『緋子の靴』の主人公のドン・ロドリゲと言う名前は、フランス人にとっては高潔さの象徴である。そのロドリゲは、名古屋城に幽閉されるが、脱出に成功する。その後、地中海に浮かぶ船の上で、お伴に連れてきた大仏という名の日本人画家に、カトリックの聖人像を描かせる。何と日本人がカトリックの聖人像を描くことができるのである。そして、ロドリゲは大仏に、名古屋城での思い出を語るが、ロドリゲは、城にいた時、日本を「聞く」ことができたと言う。

彼が聞くことのできたものは、まず始めに、桜の木や花や鯉などが発する「なぜ？」という問い掛けであった。それらの物は、日本の風景の中にあって、沈黙のオーラを放ちながら、まるで自問自答を続けているかのように存在していたのである。そして、次いで、彼は、その「沈黙」を聞くことができたのだ。ロドリゲは、日本の絵について語りながら、そこには人物はいないと言うが、しかし、実際は、多数の人物が描かれている。それらの人物は、ちょうど書き終わられた瞬間に固定される漢字のように、永遠の中に凝固しているのである。

クローデルは、文楽に、その特徴的な表現を見出している。文楽が演じられる中で、三味線弾きが「イヨッ」、「ハァッ」と声を上げる。三味線弾きは、声を上げるだけで、決して語らないが、しかし、それだけであらゆる感情を表現し、上演全体の指揮役を務めているのである。日本語には「物のあはれを知る」という表現があるが、感動のあまり思わず「アァ」と声を上げる時がある。日本にやってきたヨーロッパ人が驚くことの一つに、日本語の会話の中に見られる「アァ」という間投詞の使い方がある。その間投詞が、それに続く無数の受け答えのきっかけとなっているのである。おそらく、そこに、文楽や能に見られる掛け声の原点があるのだろう。

さて、ヨーロッパ人が日本に興味を持つその対象は、時代と共に変化してきた。19世紀末には、一般の人々の間には小さな古美術品の収集が流行し、美術家たちは浮世絵に興味を持った。第一次世界大戦後の人々は、また別の興味を持ち、例えば、アンリ・ミショーは、東京の建築に近代性を

認めた。そして、第二次世界大戦の後、日本はニューヨーク近代美術館で開催された日本建築展をもって、西洋芸術シーンに復帰を果たしたわけだが、そこで注目されたのは、特に禪に結びつく側面であり、ロラン・バルトは、とりわけこの側面に興味を抱いたのである。

バルトは、日本が好きだったが、特に東京の町が好きだった。彼は、見たところ一応正しいように見えるが結局は欺瞞にすぎないようなものを、とても警戒しており、そういう意味で、ヨーロッパ文明の中では、身振りに言葉にも、すべてに何らかの意味がこびりついていると言っていた。何かがこびりついているのだが、しかし、それをはぎ取ることができないのである。そう思っていたバルトが東京にやってきて感じたのは、全く新しい自由の印象であった。東京の雑踏の中では、皆がひしめき合いながら、しかし、決して直接触れ合うことなく、他人の行動にあまり感心を持たずに生きている。町には奇妙なものがあふれ、それらを見ても直ちに理解することができないので、しばらくはそのまま放っておかれる。日本人の生活の中に、彼が見ようとしたものは、そういう自由であった。

バルトは希代の散歩者だった。しかし、散歩にふさわしいような場所には全く出向かず、彼が散歩をしたのは、東京駅周辺や上野や池袋など、さまざまな街が、縦横に、また地下に広がり、重なり合い、さまざまな人が集まり、またそこから出てゆくような穴のような場所、すなわち一種の「虚点」であったのだ。

さて、以上に取り上げたすべてのテキストを通して言えることは、結局、日本の内部には、奇跡的に保存されている何かがあるということだ。それを、近代化の覆いを通してみつけるのは困難なことである。私が今日本について書きたいのは、明治の日本についてではなく、むしろ、バルトの言うような、非常に特殊な形に近代化された東京についてである。

少なくとも、この半世紀の間、日本には、日本の内部にあるものをできる限り純粋に保存しようという欲求と、できるだけ完璧にイギリスやアメリカの近代化を取り入れようとする欲求の対立があった。例えば、現在、伝統的な日本音楽の演奏家もいれば、小沢征爾のような、西洋音楽をみご

とに演奏する人もいるわけである。この二つの世界の断絶は、日本人それぞれ個人の意識の中にも存在し、今やそれらの融合の中に新しいものが生まれつつある。西洋のモデルはすでにもう大部分取り入れてしまったのだから、これからは、新しいものを生み出す段階にあるのだ。そうして生み出されるものは、古い日本にとって新しいものであろうし、また、同時に、モデルとなった西洋にとっても新しいものであろう。音楽や建築の世界では、それはすでに現れている。最近の日本の建築には、想像力と幻想に満ちていて陽気な雰囲気、どんな大都会にも存在しないような、新しい傾向が見られるし、料理についても、日本の料理と西洋料理との融合の中で、新日本料理ができあがりつつある。

まさにそれこそが、私が、日本の中に捉え、そして語りたことなのであるが、その仕事は21世紀に係わることだから、すでに20世紀の作家である私よりも、この会場に集われた大部分の方々と今は同じような年齢の、フランスの若い文筆家に託された仕事であろう。

(本学教授)